



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	汪中と国史儒林伝稿：清代揚州の文学の研究 序説
Author(s)	近藤, 光男
Citation	北海道大学人文科学論集, 3, 64-89
Issue Date	1964
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34275
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_PR64-89.pdf



汪中と国史儒林伝稿

— 清代揚州の文学の研究 序説 —

近 藤 光 男

一

揚州は、もと禹貢九州の一つとして、いまの江蘇省安徽省の全域と、浙江・江西・福建各省の一部にも亘る広大な地域を指す名であったが、隋の煬帝が漢代に呉の都城であった江都県に江都宮を置き、ここを揚州の首邑と定めてから、揚州とはこの地の呼称となった。それは揚子江の下游、鎮江の対岸、北へ延びる大運河の西岸に位置する。中国南東部の米がごとくこの大運河を動脈として北へ運ばれるので、揚州は唐代を通じて商業都市として繁栄し、とくに明以後は兩淮塩運使がここに駐して、塩政の中心地となった。清の順治元年（一三四四）、山海関を破った清軍は翌二年この地に迫り、史可法の奮戦も空しく、四月、州城の陥落に際してはまさに阿鼻叫喚のちまたと化したのであったが、乾隆も半ばに近い揚州は、その惨はもとより遠く忘れ去られて、画舫ゆきかい、文人墨客の杖を曳く、水のみやこ、詩のみやことして、繁華を極めた。当時における行政上の区劃をいえば、高郵・泰の二州と江都・甘泉・儀徵・興化・宝應の五県を領するものとして、揚州府が置かれていた。甘泉県はただ江都県から分設されたにすぎず、この江都が府治の所在、すなわちいわゆる揚州である。雅名としてしばしば廣陵をもつて呼ばれるのは、漢のときこ

の地に廣陵郡が置かれたからであり、邗江また韓江をもつて呼ばれるのは、春秋のとき呉が邗城をこの地に築き、溝を穿つて江淮に疏通したのに因る。

儀徴の阮元^{*1}の廣陵詩事（巻三）に高郵の賈田祖について記述した一条がある。

賈田祖、字は稻孫は、わが郡の經学の開祖である。同邑の李孝成^惇王懷祖^{念孫}と友人で、三人みなよく飲んだ。酒もたけなわになると古典の疑念の個所をとり出して論議するのがつねであつた。当時、古典学にたずさわつた人々、興化の任子田^{大椿}・顧文子^{九苞}、江都の汪容甫^中、寶應の劉端臨^{台拱}らは、互いに深い交友をつづけつ、おのおのその学問をつくりあげた。そのころ、元和の惠氏・休寧の戴氏は、大いに古典学を大江以南の地に興したのであつたが、江北にはこれら諸君子がその提唱をしたのである。^{*2}

ここに言うほどに賈田祖なる人を揚州の学壇に大きく位置づけしてよいかどうかには、検討すべき点があるとしてもこれはまず乾隆中葉における揚州の学界の姿をうかがうに足るものといつてよい。この間の事情を、いますこし詳しく展望しなおしてみよう。

阮元が「大いに古学を江以南に興せり」としてあげた休寧の戴震は、皖南の片田舎から出て都に上り、大宗伯の官にいた高郵の王安国の邸に寓して、その子の念孫に学業を授けた。それは乾隆二十一年（一七五六）。その翌二十二年に揚州に来て、転運使の盧見曾の署内で始めて惠棟に会い、盧見曾のために大戴禮を校刊し雅雨堂本を校定などしている。こうして数年を経た乾隆二十八年（一七六三）、戴震は再びみやこへ上つた。一方、都でその学を受けた王念孫は戴氏が去つた乾隆二十二年、十四歳で父の喪に遇つたため、柩を奉じて郷里の高郵に帰つていた。戴震の去つたあとの揚州では、賈田祖（一七二四—一七七七）・李惇（一七三四—一七八四）・汪中（一七四四—一七九四）・劉台拱（一七五一—一八〇五）らに、この王念孫（一七四四—一八三二）も加わつて、ともに古典を講究し詩歌を唱和して「江北の學」を

築いていった。これがいわば揚州漢学の第一期であつて、皖南の学問がこの地に流寓した休寧の戴氏によつて植えつけられ、高郵の王氏によつて培われた時期と、わたくしは考える。

賈田祖、李惇が相次いで世を去つたあとの揚州、すなわち乾隆五十年（一七八五）以後は、二堂とか、鍾焦黄李または江焦黄李などと併称される人々の時代となる。二堂とは焦里堂、名は循（一七六三—一八二〇）と、江鄭堂、名は藩（一七六一—一八三一）。鍾・焦・黄・李とは、鍾裏（一七六一—一八〇五）・焦循・黄承吉（一七七一—一八四二）・李鍾泗（一七七一—一八〇九）で、もし江焦黄李というときは、この鍾裏を江藩と入れかえたにすぎない。みな江都の人で、これらの呼称の存在が示すとおり、揚州の学問ないしは文化の、中心に位置すると、自他ともに許した人々である。しかし彼らにとつてすでに先輩格に当る汪中が貧窮した読書人の家に生れたように、彼らもみなほとんど顯官の家柄には生れあわせなかつた。仕官のうえにも失意を抱くことの多い人々で、その点、名門の生れである王念孫や阮元が、京官や地方の高官に歴任して、大がかりに学問を推進してゆくのははなはだ異なるのであるが、むしろこの阮元などの疵護のもとに、学問そのものを生きがいとして、華やかな時代に苦しい生活を生きぬきつつ、それぞれに意義ある業績を残した。このことは第一期にあげた学者たちにも共通する。ところでこれをまた、かりに第二期とよぶならば、この時期には明らかに呉郡の惠氏の学問が流れこんでいる。それはまた、嘉定の錢氏の学という支流をもつたものなっているが、皖南の学（多く前期に流入）と呉郡の学（多くこの期に流入）とが、揚州漢学の二つの大きな形成要素であつたとするのが、わたくしのもつ仮説である。これをもしそれぞれの学問が得意とする古典の名をもつて色別けするならば、皖南の学は礼学であり、呉郡の学は易学である。そのこと自体、まだ論証を必要とすることであるが*。

いまひとつ揚州の学問を育んだ要素として忘れられないものがある。はじめに述べたように文人墨客の杖を曳くこの景勝の地は、はなはだ流寓の詩人に富む。つとにかの揚州に名だたる蔵書樓、小玲瓏山館の主、馬曰琯（秋玉）・馬曰璐（佩兮）の兄弟を中心に邗江吟社が結ばれていて、厲鶚（樊榭）・杭世駿（重浦）・全祖望（謝山）らみなその家に寄

寓していた（蔵書紀事詩卷四）。その中には袁枚（隨園）・蔣士銓（心餘）・趙翼（甌北）そして王昶（蘭泉）など、清朝中葉の詩壇に不朽の名を残す人々がこもごもこの地に集い、唱和の日々を送るうちに多くの詩人たちを養っていった。江焦黄李のうちの黄承吉ほどに、詩の名が高いまではゆかないにしても、揚州の学者はなにがしかみな詩人である。程晉芳（一七一八—一七八四）のように、親しくこれらの詩人の門に游んだ学者も少なくなく、揚州の漢学がはでな学問と評されるのは文学の色彩がとりわけ濃厚なためである。もつとも漢学を奉ずる学者たちには、詩の普及ないしは大衆化に対しては反感をいだく傾向も強かった。袁枚あたりはその矢面てに立たされた人である。

嘉慶も末から道光朝を通じて、揚州の学壇に活躍した人々には、天文曆算学の羅士琳（一七八四—一八五三）、公羊の学者で春秋繁露に注した凌曙（一七七五—一八二九）、文選の学の薛傳均（一七八八—一八二九）、詩には梅植之（一七九四—一八四三）、その梅植之から楚辞・文選の学を受けた李祖望（一八二四—一八八二）と薛壽（一八二二—一八七二）、また汪中の子の喜孫、焦循の子の廷琥らがある。この時期には、かねて阮元によって、揚州の地にゆかりある学としても提唱されていた文選の学が、少壮学徒に自覚されてようやく擡頭してくる。しかし梅植之の師弟と交友の深かった儀徴の王翼鳳や劉文淇らも、咸豐三年（一八五三）、太平天国の乱に揚州城が壊滅したあと、相次いで非業の死を遂げ、揚州の学問文学ともに消え去ってしまう。わずかに燼餘をひろい、これを継いだ人として、李詳（興化の人、一八五九—一九三二）と古直（廣東梅県の人、一八八七—？）の名を忘れてはならないであろう。これをまた、かりに第三期としよう。

以上三期に分けて述べたところは、清代揚州の学問を考えるについて、はじめに一つの見とおしを立てようと試みたまでで、そのうちのどの事象をとらえてみても、すべて別稿を草して詳述もしくは論証すべきことがらばかりである。その詳述の資料をすでにいくらか用意できているものもあれば、まだほとんどないものもある。その多くをもたないものについては、今後の調査の結果、あるいは右の見通しの一部を修正せねばならないこともあるかと思う。

梅植之に業を受けた薛壽の學詁齋文集卷上に「揚州十經師贊并序」なるものがある。揚州の学者十人を選んで、その一人一人に贊を書いたもので、その序にいう。

吾が郷里に經学の盛んなるは、隋唐以来、曹憲及び李氏父子、二徐兄弟、みな學に淵源あり、事を實にして是を求めき。わが朝の經術は往代をはるかにしのぎて、乾嘉以来、いよいよ盛んなれば、いま先賢の江都甘泉に籍ある人を録して、おのおの贊をつけ、景仰のよすがとはせん。（吾郷經學之盛 隋唐以来 如曹憲及李氏父子 二徐兄弟

皆學有淵源 實事求是 國朝經術 超邁往代 乾嘉以来 於斯爲盛 今摘錄先賢之籍隸江甘者 各系贊以志嚮往）

曹憲は隋に仕えて秘書学士となり、諸儒と桂苑珠叢を撰した。小学に詳しく、文選を子弟に授け、その音は當時に重んぜられ、またその傳雅音は王念孫が校定している。李氏父子とは李善とその子鷟、字は泰和であろう。父の文選注を補い、玄宗のとき北海太守となつたから李北海とよばれた人である。二徐兄弟とは宋の徐鉉徐鉉の兄弟、いわゆる大徐・小徐である。この序はかように揚州の地に小学と選學のゆかりがあることを述べて、乾嘉以来の學術はその伝統の上に開花したものとす。そして数える十經師の名は、汪中（容甫）・張宗泰（登封）・江藩（鄭堂）・鍾震（葆岐）焦循（里堂）・李鍾泗（濱石）・黃承吉（春谷）・徐復（心仲）・凌曙（曉樓）・薛傳均（子韻）である。筆頭に措かれた汪中に与えられている贊には

文學之盛 廣陵之城 篤生汪氏 示人典程 口敝百代 心契七經 述學四卷 鈎玄索冥

左氏述義 著錄未成 經義知新 亦博亦精 儒林文苑 兼有令名 斯文領袖 權輿先生

とある。ここにはこの贊の句々について釈することは省く。ただ「儒林文苑、兼ねて令名あり」の句の意味するところは、本稿のはじめに当って詳述するところにより、おのずから明かにできるであろう。この贊を書いた薛壽はまた汪氏遺書後序をも書いている（學詁齋文集卷下）。およそ一千数百言におよぶ駢散文であるが、その中にも

鄉邦文獻 上繼徐鉉李善而無慚

國史品評 庶兼文苑儒林而不愧

とみえるのは、汪中の学問の、經學と文學とを兼載する性格を指摘するものであるとともに、先きの十経師贊の序にいうところと相俟つて、遠く唐時代まで遡りうる揚州の地の学問の伝統の中にそれを位置づけようとしていることがわかる。なおかように駢散文で遺書の序を書いたり、土地の十経師を選んで贊を書いたりする、そのこと自体がまたいかにも揚州の学問であることを思わせる。なぜなら、実はそこにはなにがしかの學術史が、文學史が語られているからである。揚州學術史の資料としては、著者自身がそれを意識して書いたともいえる江藩の漢學師承記卷七を忘れてはならないが、これは列伝体を取りながら、またはなはだ文學の主張の色が濃厚である。その点、次に述べる譚獻の表などは、むしろ古く漢書の古今人表のきらいがないではないが、なかなか識見を認めてよいと思われる点がある。

清朝も末に仁和（浙江省）の譚獻（一八三〇—一九〇二）は復堂日記六巻を残した。復堂類集之四として刊行されたが、その巻一に師儒表というものがある。題下に自ら注して「一時之見、未爲論定、錄存日記備忘」とことわつてもいるとおり、いかにもみずからの備忘のための表にすぎないであろうが、時期としては清一代の学問が完全に結実したとき、そして広般な読書の所産である。まず表全体を見通すと、絶學一・名家二・大儒三・通儒四・舊學五・経師六・文儒七・校讐名家八・輿地名家九・小学名家十・提唱學者十一から成る。ここにその表すべてを挙げることはひかえる。ただ揚州漢學についてもっとも注目すべきは、この表の「絶學」の類である。従つて表中、一の絶學のみ、そのままここに掲げてみよう。

絶學 一

莊方耕先生學家 從子葆琛先生 孫綬甲卿珊

汪容甫先生學家子喜孫孟慈

學同劉端臨氏

李孝臣氏

賈稻孫氏

江鄭堂氏

章實齋先生

學同邵二雲先生

龔定庵先生

學同魏默深氏

出別黃春谷氏

學同焦里堂氏學家子廷琥虎玉

春谷
傳詩王翼鳳句生

梅植之蘊生

二葆
甥琛

劉申受先生
宋于庭先生

この表を見ると、莊存與にはじまり劉逢祿・宋翔鳳に至るのはいわゆる常州学派、それに汪中をかしらとする揚州学

派が並び、次いで章學誠と龔自珍とが独立して立てられたあとに、「別出」として黄承吉＊をにかけて焦循はこれの「同学」としている。黄承吉が清詩の歴史の上に意味深い存在であることは、これに「春谷傳詩」として王翼鳳と植梅之を附することによって語られている。わたくしがさきに揚州の学者として述べた人々に対して、譚獻は絶学の名を与えた。高郵の王氏父子は錢大昕・惠棟らとともに第二表「名家」に在り、儀徴の阮氏＊は朱筠と併せて第十一表「提倡學者」を成す。ここにみえるのは「江都甘泉に籍ある人」すなわち純乎たる揚州の学者ばかりになっている。では絶学とはどういう学問をいうのか。それはその学問のできる人が容易には得られない、一種独特な風格をもつ学問を意味するものである。すでに揚州の学者たちの会話の中にもそのことはみえてい＊る。まことに揚州の学問、いわゆる揚州漢学は、絶学の名を与えられるにふさわしいであろう。それだけに揚州漢学の発展を跡づけるとともに、その性格を究明しておくことは、清代學術史、文學史を考えるに際して、もつとも重要な作業の一つであるといえよう。

ここにはその手はじめとして、汪中をとりあげてみたい。揚州漢学の一つの典型ともいえる人物と考えるからであるが、かりに右に述べた譚獻の師儒表、薛壽の十経師贊についてみてもそれは首肯されるであろう。

汪中なる人物を知るについて、やはり江藩の漢学師承記はすぐれた資料の一つである。碑誌伝状としては、劉台拱（二七五一—一八〇五）の汪君伝（劉端臨文集卷一）・王昶（一七二四—一八〇七）の汪容甫墓碣（春融堂集卷五十九）・凌廷堪（二七五五—一八〇九）の汪容甫墓誌銘（校禮堂文集卷三十五）・孫星衍（一七五三—一八一八）の汪中伝（五松園文稿卷一）・王引之（一七六六—一八三四）の汪容甫先生行狀（王文簡公文集卷四）・陳壽祺（一七七—一八三四）の清故拔貢生汪先生墓志銘（左海文集卷九）があり、その他、洪亮吉（一七四六—一八〇九）の又書三友人遺事（更生齋文甲集卷四）をはじめとする逸聞の類、また淮海英靈集の小伝、湖海詩伝の蒲褐山房詩話などもあり、とくに子の喜孫が鋭意蒐集した資料は挙げ江都汪氏叢書に収められている。稻葉誠一氏の汪中伝稿（東方學第九輯）は精確に集成された年譜といえる。ここには以上主要な資料を挙げるにとどめて、汪中については略伝をも語ることは省く。むしろ問題提起の一つの方法とし

て、国史館において儒林伝から汪中の伝が外されたことがあるという、まだあまり人に知られていない事実について、まずその事の経緯に探究の興味を向けるとともに、そのことがらが揚州漢学の歴史とその性格のうえにおいてもつ意味について考えてみたいと思う。

二

十二月九日世姪汪喜孫頓首

懷祖老伯大人執事冬至前由朱詠

齋詹事寄呈寸楮以史館纂錄文

苑傳先君行事與袁江寧江將苦生

太史同列懇無以定千秋之公論袁求

老伯大人寄書漕督阮公辨正之諒蒙

俯加甄錄伏念

老伯大人學術政術焯赫一時重以先

君文章道誼之交當世僅有存者

老伯靈光巍然阮公及史館從事俱

諸公莫不信從

執事僅蒙致書阮公屬其改入儒林

嘉慶二十五年（一八二〇）も冬至に近いある日、母の病い

にかしづいて郷里の揚州にいた汪喜孫のもとへ、都にいる

友人の朱士彦（詠齋）から一通のがみが届いた。彼の父、

汪中が世を去つてすでに二十五年、てがみを開いて愕然と

した汪喜孫は、さきごろまで都にいて教えを受けた先生で

あり、また父の親友でもあつた王念孫（懷祖）に、いそいで

懇願のがみを差し出すべく筆を執つた。上にその書簡を

景照し、下にその全文を訳出しよう。

十二月九日、世姪^{*7}汪喜孫、頓首して

懷祖先生^{*8}に申し上げます。冬至まえ、朱詠齋詹事^{*9}よ

りてがみが来て知らせてまいりましたところでは、

国史館に於いては文苑伝を纂録されており、亡父の

事跡は、袁江寧^{*10}・蔣苕生太史^{*11}らと同列に置かれた模

様、これで千載の公論を定められはしないか心配で

なりません。

庶幾先君身後之名白

執事一言論定可以信今可以傳後先

君亦且含笑九原矣

老伯大人與先君講學垂三十年先君

費志沒地著書未成其子不傳讀父之

書紹述先人之業今日以萬世不朽之

令名侍

老伯一紙之書以為定論喜極烏鳥

之情不足重輕即先君車立之盟亦

不可以持公議惟是

一代史傳之例舍

執事其誰辨之喜極奉侍母疾藥裏

經時體氣素羸見在亦服藥餌韓

江千里北顧恒營坤叩

舅安不勝哀感懷惻之至喜極謹狀

先生にお願いいたします。どうか、漕督の阮公にお
てがみを書いてくださいまして、これを辨正し、な
んとか吟味しなおしていただけますよう御配慮を賜
りたく存じます。

先生の、学者として、また政治家としての力量は当
代に知れわたつていますうえに、亡父が文章と道義
の交りをいただいたかたで当今ただおひとりの存命
者でいられます。

先生は、魯の靈光殿さながらに巍然としておられ、
阮公も史館で編纂に当つている人々も、誰とて心服
していない人はありません。

先生から、おてがみを阮公に寄せ、改めて儒林伝に
入れるよう頼んでいただけますならば、亡父の死後
の名は

先生の一言によつて論定され、今日の定論となり、
後世に伝えられることとなりましようから、亡父も
さぞや九泉にて笑みをうかべることでございまし
よう。

先生が亡父と学問を研究なさいましたのは、二十年
に垂んといいたします。父は志を上げえずして没し、

著作も未完成でし、その子は父の書を読まず父の業をついでおりません。今日では万世不朽の令名が先生の一封のおてがみによって定論としていただけるのを期待しています。わたくしの嘆息などはまるで顧みてもらえませんか、たとえ亡父の氣のあつた友だちがおりましても、とても公議を正すことなどできません。まったく

わが朝の史伝の体例こそは

先生を舍いて他に誰が辯じえましよう。わたくしは母の病に侍し、藥物に埋れて過しますうちに、もともと弱い體質のこととて、いまではわたくしも藥を服しております。揚州の地からはるか北を望んで氣もおちつきません。

御多幸を祈り上げます。哀感の迫るに堪えきれずして、謹んで筆を執りました。喜孫 拝。

このてがみは民国七年（一九一八）に上虞の羅氏（羅振玉）が、北京の王氏宅（高郵の王念孫・王引之父子の京邸）に残っていた十二家二十六通の書簡を影印して、昭代経師手簡初篇と題して世に出した書物にみえる。つまりそれまでは人の目に触れることはなかった資料である。^{*13} 汪喜孫は父の著述はもとより、およそ父に関する資料のすべてを実に丹念に集めた人で、その成果は江都汪氏叢書として家刻し、いまではその景印本もある。汪中が亡くなったとき喜孫はわずかに九歳であつた。阮元は「その家に出むいて遺書を求めたが、一片の紙きれさえも得られなかった」という（淮海英鑑集卷四汪中小伝）。それを思えば生涯不遇をかこつ汪中も、よい子に恵まれたと言つてよい。ところでその江都汪氏叢書に汪喜孫は自ら輯した汪氏学行記六巻を収める。その巻第三にさりげなく記録されている一通の書簡に注意しなければならぬ。

聞

尊 大人 已 入 儒 林 傳 不 獨

聞くところによれば御尊父はすでに儒林伝に入られました由です。ただに御尊父の名を不朽に

尊 大 人 之 名 垂 不 朽 所 以 鼓

舞 後 進 者 其 益 無 疆 也

垂れるのみならず、後進を鼓舞することとなり、
その益はかぎりないものと存じます。

これは明らかに、喜孫の懇願をうけた王念孫からの返書である。つまり汪喜孫は、王念孫から父がすでに儒林伝に収められていることを知らされたがみはこうして記録しているのであるが、なぜかようなてがみをもらったのかは語りたがらない。喜孫の集は汪孟慈文集^{＊14}といい、その稿本は邃雅齋叢書に景印されたが、この懇願のてがみなど録すべくもない。汪喜孫にしてみれば、後世、高郵王氏の京邸からかの十二月九日付け手簡が出て公表されることになろうとは予想しなかったであろう。ところでその十二月九日が何年のことであるかについて実は疑念がある。またこのてがみの文面について見るかぎり、汪中の伝ははじめから儒林伝に入れられず、文苑伝の纂集に際してはじめて採録されたかにみえる。そこで、はじめにその年を嘉慶二十五年と推定した理由から述べよう。

汪喜孫の自訂年譜稿本、嘉慶十九年（一八一四）の条には、

嘉慶十九年 甲戌二十九歲 阮撫部爲先君作儒林傳

余計偕過淮安漕督署往謝之 阮公以南碑北帖論見

示 其實王右軍北宗非南派也

とみえ、彼は阮元が彼の父のために儒林伝を撰じたというので、会試に赴く途次、淮安の漕督署に阮元を訪ねて、謝意を表している。そのことをそのとき阮元から新作の論文「南碑北帖論」を示された思い出をも含めて記すのであるが、これは一体、彼の懇願にもとづく王念孫の口添えがあつて、はじめて伝が立てられたのに対しての謝意なのであるうか。

喜孫手簡にいう「漕督の阮公」とは、もとより阮元である。阮元は嘉慶十五年（一八一〇）に自ら願ひ出て国史館総輯を兼任して、国史儒林伝の編纂に当り、十七年に進呈している。そして同年八月に漕運総督として都を離れ、二十二年に両広総督として広州に赴任するまでは、「漕督」としてその駐在地である淮安（江蘇省）にいた。従つて「漕

督の阮公」とよぶのをこの任期に固く結ぶならば、このてがみは嘉慶十七年以後二十一年（一八一六）暮れまでの間となる。ところがいまこのてがみを書く動機となった書簡を寄せた朱士彦のことを「朱詠齋詹事」とよんでいる。朱士彦が詹事府少詹事となつたのは嘉慶二十四年（一八一九）である。してみると阮元を漕督とよんだのは不用意もしくは慣習にもとづくとはできても、朱士彦を詹事とよんだことは無視できない。そのうえ嘉慶二十年ころから喜孫はめだつて王念孫と交渉が多い。王念孫が述学の序を書いたのはこの年正月七日である。二十二年に段氏説文注を喜孫に贈り「これは宝剑を烈士に贈るに等しい」と言つたという（孟慈自訂年譜稿本）。このころ汪喜孫はいくたびも礼部の試（会試）に応じて都にいたから、王念孫の門に親しく出入りしたのである。するとかえつて、懇願をするのにてがみを用いる必要はないことになる。しかし問題のてがみは揚州から出していることは「邗江千里」の句でも明らかである。早歳、郷試に挙げられたにもかかわらず、八度も礼部の試に赴いてみな及第しなかつた汪喜孫は、しばしば南北の間を往来してはいるが、嘉慶二十五年七月、仁宗が崩じると、喜孫は母を伴い十三日の行程で揚州へ歸つてゐる。因つてころみにこの在郷中の時に擬定してみたものである。もつとも、すぐまた道光元年には母とともに都入りをしてゐるが。^{*16}

阮元の儒林伝稿はいま道光中（一八二一—五〇）甘泉の黄奭が輯した巾箱本の知足齋叢書に四巻が収められている。のち光緒十一年（一八八五）に儀徴の張氏が榕園叢書に重刊している。その巻第四に任大椿の伝が立てられ、これに附伝として李惇・劉台拱・汪中の三人がみえる。任大椿についての記述の終つたあと、

時江北學者 李惇 劉台拱 汪中 皆繼起 汪中述學
 といつて李・劉二氏を記し、つづいて

汪中 字容甫 江都拔貢生 好古博學 長於經誼 王昶春融堂集 於詩古文書
 翰 無所文工 著周官徵文 左氏春秋釋義 皆依據經證 箴砭俗學

孫星衍
汪中傳 又撰述學内外篇
志附

という集伝体の記述がみえる。阮元は集傳という編纂方法による以上、汪中について「好古博學、經誼に長じ、詩古文書翰に於いて、工ならざる所無し」というにしても「俗学を箴砭す」というにしても、自然それは王昶や孫星衍のことばそのままではあるが、阮元がその語を集句したこと自体に、汪中の学問文学に対する阮元の評価が一層鋭くこめられているのである。^{*17}

一体、阮元はどの程度まで汪中なる人物を知り、どのように評価していたか、それを考えるに足る資料は必ずしも乏しくはない。阮元の隨筆集である廣陵詩事（刊本）、定香亭筆談（刊本）、琅環僊館書叙錄（汪氏學行記に引く）など參觀するに足るが、いまは淮海英靈集の小伝を見よう。阮元は、汪中が史学に精しかつたこと、自ら春秋の学に深いと言っていたことを記し、やや問題の多いその人柄について「とかく人をからかつたり人と争つたりするのが欠点とされているが、しかし錢大昕・段玉裁・王念孫・程瑤田をいつも口を極めて推崇していたし、また顧炎武・胡渭・梅文鼎・閻若璩・惠棟・戴震のためには六君子頌を作つたこともある。これによつても、謙遜で善をこのむ人柄であつたことがわかる」と弁護している。汪中と同郡のよしみをもち、またかようにその学行に対して少なくとも冷静な批判のできた阮元が、果して汪喜孫の懇願にもとづく王念孫の慫慂を俟つて、任大椿附伝のかたちにもせよ、今日の儒林伝稿にみるように、はじめて汪中の伝を付したのであるうか。

いま阮元の寧經室續集卷二に擬儒林伝稿凡例、ならびに集伝錄存がある。後者のあとに嗣子常生が案語を付して次のようにいう。

父はむかし儒林伝一百數十人を選した。それは諸文献を集成してつくる方法であつた。いまにも完成というときに、漕運総督となつて急にみやこを離れた。その後、史館では父の残した稿を底稿とはしたが、数篇を除いたし、また除きはしなかつた人の伝でも文中の字句には刪つたものもある。それにしても除いた伝は、みなもう儒林伝

と定められ史館の文とされているのであるから、私家の集に刊入できない。その点、とり除いた伝は、たちまち史館の文ではなくなっているから、儒林という名はとり去って私家の集に収めても差支えはないはずである。そういうわけでいま旧稿をとり出して一篇にまとめ、寧經室續集に収録する。

してみると、ここに収録されている十六篇、凡そ二十余人の伝は、みな阮元が翰林を去ったあとで史館の裁量を以て刪り去られたものと分かる。いまその目を作りここに掲げる。

毛奇齡 陸邦烈 沈國模 史孝咸 邵曾可 韓孔當 勞史 桑調元 汪鑾 談泰 桂馥
錢澄之 方中通 弟中履 朱鶴齡 臧庸 閻循觀 汪紱 金榜 王鳴盛 丁杰
任大椿 李惇 劉台拱 汪中 孔廣森 張惠言 孔興燮 孔繼涵 顏光猷

ここに刪り去られた十六篇の一つとしてではあるが、任大椿の附伝として汪中が見えることは、かえって阮元が史館に在るときすでに汪中を儒林伝に収めていた確実な証拠となる。朱士彦が汪喜孫に報せた消息は決して虚報ではなかったし、それは儒林から外されて文苑にまわされることになっていると知つての報せであつたのであらう。またそれは阮元の汪中の学問に対する品藻にはなんのかかわりもなく、阮元その人の全く関知せぬことであつたことを知るのである。従つて汪喜孫が淮安漕督署を訪れての謝意は、史館に在つての阮元の、父の学問に対する認識に対してであつて、後日のできごととはまだ知る由もなくてにちがいない。

今日みられる儒林伝稿（前述、知足齋叢書本・榕園叢書本^{*15}）には、ひとたびは確かに刪り去られた十六篇のことごとくが収録されており、そのうち汪中伝の文は先に記したとおりである。なお国史館では、纂修に与る臣がそれぞれに分纂するので、同一人の伝が各種残されることもあつたらしい。汪氏学行記卷三に喜孫は「擬儒林傳稿」として、阮元が汪中のために撰した伝のほかに、朱珪（蘭坡）の撰した伝と錢林（叔雅）の撰した伝を収めている。

朱珪のは

汪中字容甫 拔貢生 治左氏春秋 識議超卓 爲唐以下所未有
撰述學内外篇 經術詞術 并臻絕詣 事母以孝聞 卒年五十一
錢林のは

汪中字容甫 江都人 乾隆四十二年選拔貢生 少時爲經世之學
求合世用 中年專治經史 實事求是 不尙墨守 著爲文詞 博大
淹通 凌轅一時 爲江淮學者冠 尤深于春秋左氏 著春秋述義
又撰述學内外篇 識議超卓 成一家言 卒年五十一

である。ところでこれらはみな、民国十六年に張爾巽を館長とする清史館が完成した「清史稿」の儒林伝にみる汪中
伝とははなはだ異なる。清史稿儒林伝二に、汪中は江德量・徐復・汪光燾を附伝として、かえって独立した伝を立てら
れ、学説の紹介をも含んでおよそ一千余言、それに先立つ王念孫の伝に匹敵する扱いをうけている。これら事象の分
析とその経緯の調査は別稿にゆずらねばならない。^{*20}ここにはむしろ王喜孫の「尚友記」に関する疑念を述べておこう。
遼雅齋叢書には「尚友記稿本」不分巻を収めるし、またその汪孟慈文集稿本に、尚友記自叙がみられる。この自叙
によると、

昔阮相公撰儒林傳 未成遷漕運總督 以其藁囑喜荀 藏之名山
喜荀因補其缺 爲家傳若干篇 所以備史臣采錄也 未爲史官
不敢作傳 名之曰尚友記

とまずいのであるが、嘉慶十七年八月、漕督として史館を離れるに際して、阮元は儒林伝稿を「進呈」している。
それは雷塘庵主弟子記その他に徴するまでもなく当然であろう。それに当時、喜孫（のち喜荀と改名）は二十七歳の学
人にすぎない。「その稿を以て喜荀に囑し、之を名山に藏せしむ」というようなことがありうるであろうか。その稿

とは彼の父、汪中の稿だけをいうともうけとれない。「因つてその缺を補ひ」とは、彼が阮元の伝にあるべくして伝のないと思う人について、自ら伝を撰したことを言うのであろうから。しかもそのうえ「かといつて自分は史官ではないから、²¹『伝』というのははばかりがあるう。」尚友記」と命名しておく」といつている。さらにこれについて、

潘少司馬錫恩 爲丁卯同年生 撰文苑循吏傳 未成調河道 錢學

士林 爲壬午薦主 撰儒林文苑傳 亦未成 臨終以手藁付喜荀

因屬其門人王按察使璟授梓復補二公之闕 附尚友記

という。するとさらに藩錫恩と錢林の稿を得て、そこにあるべくしていずれにもない人々を補つてつけ加え、彼の尚友記は、²¹『史臣の採録』を待つてゐる、とみてよい。錢林は道光八年に没した（一七六二—一八二八 汪喜孫撰伝）から、この記事はそれ以後のものであり、臨終に喜荀に手渡したという稿は「紀事底藁」と称し、十冊に綴じられていた。門人王藻（菽原）の努力によつて「文獻徵存錄」（十卷 咸豐八年通州王氏有嘉樹軒刊本）として今日見られるものがこれである。喜孫の「王按察使璟」と記すのが明らかに王藻のことである。²²王藻の奔走にもかかわらず、喜孫は師の錢林の稿を吞んで、なしくずしにしか渡さなかつたらしい。文獻徵存錄の序に王藻がことの次第を詳しく書いてゐるところから、かえつてこの錢林の稿が汪喜孫のもとにあつたということには信がおける。

ついでながらこの尚友記自叙の中で、いまひとつ喜孫の人がらうかがうに足ると思うことがある。それは、この序の中に「吾歎汪雙池 江慎修 吾楊朱士泉 王白田 無漢宋門戸之見 實事求是 躬行實踐 蔚爲大儒」の文があり、王白田、すなわち朱子年譜を作つた王懋竑（實應の人）を、汪烜・江永・朱澤澐と並べて「大儒」と頌してゐる。ところが、これより二十余年前ではあるが、彼が江藩の漢學師承記に跋を書いたとき（嘉慶十七年 一八一二）には、「王白田根據漢宋 比諸春秋之調人 惡莠亂苗 似是而非 自非大儒 孰有能辨之者」といつてゐる。二十年の歲月が彼自身において漢宋門戸の見を捨てさせたのであろうか。それとも、勢いの然らしむるところ「苗を乱す莠」として惡

むべしとしたその人をも、郷里の儒林に列しては大儒とあがめるのであろうか。それはともあれ、いまは尚友記稿本について、家伝を作られている人を調べてみよう。

鄭虎文（試齋 秀水の人） 趙懷玉（味辛 武進の人） 焦循（里堂 甘泉の人） 丁杰（升衢 歸安の人） 臧

禮堂（庸の弟 武進の人） 孫星衍（淵如 陽湖の人） 程晉芳（魚門 戴園 江都の人） 劉台拱（端臨 寶應の

人） 李惇（成裕 高郵の人） 任大椿（幼植 興化の人） 盧文弨（紹弓 杭州の人） 汪萊（孝嬰 歙人） 李

因篤（孔德 山西洪洞の人） 馮廷丞（均弼 代州の人）

の十四人である。人数も僅かなれば顔ぶれもまた雑然として、いかにも「闕けたるを補つたもの、しかもその一部かと思える。ここで疑問と思うのは、劉台拱・李惇・任大椿の名がみえることである。これらはすでに述べたように阮常生の集伝録存にみえる人で、かえって阮元の稿に確かにあつたとわかる人たちである。喜孫が見たのがもし刪り去られたあとの稿本であつたのなら、彼の父の伝もないことを、朱士彦からの來翰をまつまでもなく知つたはずではないか。阮元が「漕運總督に遷るとき、其の藁を以て喜荀に囑し」たなどということが、ここに至つて一層疑わしくなってくる。

中国の正史に儒林列伝を見るのは、すでに太史公司馬遷の書以来であるが、文苑伝は范氏の後漢書に至つてはじめて立てられた。爾来この両伝は中国の正史の上に分合有無の幾變遷を遂げて來た。その分合有無はひとえにその時代の学問の性格がおのずから馴致した結果とみるべきで、宋史における道学伝の出現などその証である。清朝の学問に對しては、その性格から考えてみても儒林・文苑の両伝が並び立てられることとなるのは当然であらう。ところでさきの汪喜孫手簡は、この両伝に軒輊をみとめる觀念を基調としてみるとみてよいであらう。それは果して当時における通念であつたらうか。

国史館における作業は、交代した新王朝で勝朝の正史を編纂しようというばあいとは異り、その時代の学者たちの碑誌伝状を採って史料をととのえてゆくのであるから、その父その師その友にやがて史館の断が下され、まさに「千秋の定論」となることでもあり、天下の学者の関心が史館に集るのは自然である。それだけに史館とてもその編纂については、史館独自の裁量にのみよることなく、広く江湖の学者の意見を徴したようである。そのころ焦循が汪喜孫に与えたてがみの中に、

昨年、史館では儒林文苑の両伝に、いかなる人物を入れるべきやとのおたずねがありましたので、尊公（喜孫の父、汪中）の名を挙げ、儒林伝に入れられるべく申しおきましたが、採択せられたかどうかは存じません。とは申せこれは公論ではございますが。（汪氏學行記卷三所収）

と言っているのに見ても、その間の事情がうかがえる。もつともこの筆使いからすると、これは汪喜孫からの質疑に答えた返書なのであろう。焦循は別に汪中だけを史館に答申したのではなかった。雕菰樓集卷十二に、国史儒林文苑伝議なる文があつて、焦循は「芻蕘に詢はるるに備ふ」とて、編纂について七則を呈言している。その第四則を「鑒別」と題して「儒林文苑両伝が分けてたてられたからには、そのおのおのに属す人々が誤り混じてはならない」とし「経学者だからといって辞賦を習わないわけではなく、文学者だからといっても経書の訓詁はわきまえていよう。その軽重をはかつて考えるがよろしかろう」と注意し、その例として「黄宗羲・毛奇齡・全祖望は詩文に富んではいるが、学問が文学よりも先きだっている。朱彝尊・姜宸英・汪琬は経学の業績がなくはないが、文学が学問よりすぐれている」といい、つづいて、儒林に入れることにまず異論のない人々として、専門に分けて二十余家を挙げる。「推歩（天文曆算）の王錫闡・梅文鼎・陳厚耀。音学（音韻學）の顧炎武。律呂（音楽理論）の王蘭生。易の胡煦・惠棟。春秋の萬斯大・顧棟高。禹貢の胡渭。尚書の閻若璩。儀礼の張爾岐。爾雅の邵晉涵。朱子を服膺する王懋竑。明史を論定した萬斯同。諸書を校輯した方苞・齊召南・周永年・陸錫熊。声音訓詁、名物象数の江永・戴震・錢塘」である。

専門ごとに注記して、ほかにまだ人があることをつねに注意しているが、そのうち名物象数の学に注して「近時、程瑤田の通藝録のごとき、また揚州の任大椿・李惇・劉台拱・顧九苞ら、みなこの学を為す」という。

焦循の「鑒別」はまだつづく。「同じく校讎家でも、何焯は文苑に入れるがよろしく――明の茅良らの一派であるから――、盧文弨は儒林に置くのがよろしい――唐の陸德明らに比しうるゆえ――。同じく博物の人でも、錢大昕は儒林に入れ――なぜならその博さは学問における博さだから――、袁枚は文苑に置くのがよい――なぜならその博さが文における博さだから――」とその帰属を弁別する。そしてかように考えてゆくと、「馬驢・沈彤・陳祖範・應搢謙・孔廣森・朱筠・金榜・武億・王鳴盛・江聲・任大椿・張惠言・汪中は、みな儒林の選なり。魏禧・尤侗・施閏章・田雯・周亮工・吳梅村・陳維崧・吳綺・汪懋麟・馮景・杭世駿は、みな文苑の雄なり」といい、そのいづれにも、ただ自分が知っている人々を挙げただけで、これだけだというのではなく、他にまだ多いことをこわわっている。そのことわりはいかに適切であつて、これらはすべて例示したものとして見るべきであるが、その議論はおおむね持平の論であり、彼みずからも公論と考えるところを述べたつもりであろう。

とはいえ、もし個々の点をとらえて検討を加えるならばもとより多くの問題が浮び上ってくるにちがいない。ここで帰属を分かつためではあるが、錢大昕と袁枚とを博物の士として並べてとり出している点に注意しよう。錢袁二氏は詩の友であつて、詩風も近いものがあるとわたくしは考える^{*24}。しかし広い意味での学問の性格はたしかに両者はなほ異なる。この対比にはあるいは焦循らしい新鮮な感覚を認めるべきであるかもしれない。焦循も揚州の人であるが、揚州の漢学を奉ずる人たち、というか少なくとも汪中その人には、袁枚の風格をけがらうする傾向が認められる。汪中など「時の人には軽ろがろしく許さず、世に盛名をうたわれている人は、必ず思うままに譏った。なかにそれを誡める人があると『わたくしが罵る人みな、古今を辨えぬ人ではないが、莠が苗を乱すの恐れるにほかならない。方苞や袁枚のやからは、なにもわざわざ罵るまでもなからうが』といった」とは、甘泉の江藩が漢学師承記（卷

七)に記すところである。焦循はその方苞をも、校輯家として儒林に薦めている。いっぽう汪中の家刻小字本述学内篇を見ると「婦人無主問答」のあとに「方望侍郎家廟不爲婦人作主以爲禮也」と記して批判を加え「其爲不學 又不足言矣」と結ぶなどは、随分ひどい罵りかたである。さすがこの句はほかの刊本では削り去られて「中謹据禮正之如此」に代えられているが、それは喜孫の配慮によるものかもしれない。しかしその喜孫も、さきの王念孫に出した懇願のてがみで「亡父の事跡が袁江寧や蔣荅生太史らと同列に置かれて、千載の公論を定められはしないか心配でならない」とまでいう。袁江寧とは袁枚である。江寧の知県であつたことがあるからそうよんだのであるが、号の隨園で知られる。またこの蔣荅生太史とは蔣士銓である。汪中は恐らく日頃、軽侮していたであろう。洪亮吉の書いた書三友人遺事(更生齋文甲集卷四)によると、汪中が揚州の安定書院に学んでいたとき(それは十六七で博士弟子に補されてのち二十歳で鼎学の附生となるまでの間のことであろうが)、院長が更迭するごとに汪中は経史の書をたばさんで会いにゆき、数か処の質問をする。そのなかに答えられないところがあると、大笑いをして退出したという。その被害者として名が見えるのが沈志祖とこの蔣士銓である。沈志祖などそのときもう老年で、こんな目にあわされて数日後に亡くなったので、人々は汪中のためだといい、狂生とあだ名したという。この話を書き残した洪亮吉は汪中より三歳の年少で、陽湖の人。この遺事に記すところは、みな汪中の傍に在つての実見にもとづくもので、資料としての信憑度は最も高い。汪中のこうした性格をうけつぎ、少なくともその人物評価を習聞していた喜孫は、その感情をこの懇願のてがみにも思わず露呈したものと考えてよからう。喜孫は汪中の晩年の子であることはその名の示すとおりであるが、乾隆五十一年、汪中四十一歳のときに生れて、わずか九歳にして父に死別している。しかし晩年その生活が物心両面とも比較的安定した汪中は、この子の薫育にかなりの力を注いだとがあり、子は父の遺志を多く受け継いだにちがいない。ともあれ同じ揚州の学者でも、焦循の態度には、方苞・袁枚らに対して汪氏父子にみるような感情的な評価は認められず、ひいては儒林文苑両伝に対するうけとりかたも、はなはだ冷静であり、文苑伝に対する認識にみても、文

六月五日午刻同

懷祖大兄至忘春仲渴

手書不尉飢渴早義解食臨在補火生上建堂

中痛後甚健大乃有飲食各四力能是以解爾所恨

手事未清任多東馬同唯在久春然時在寓

少間當一覽之

良友泰伯廣銘請答釋義三篇以乞

教之今時古學大興行字則釋義更苦點錢部

與別者存及

是下父子各文章一室中欲置身其間者有云

此也以為上向來觀之此三篇視之而不言何云

作向者上之已成無幾乎師之有貴性者亦

此也子已三歲觀其質字甚佳其物作中不可失

主子之願可教三家子弟每同漢習斯感幸如附

送片不盡勉想中懷了

学に対する意識が汪喜孫あたりとはよほど異つていたことが認められる。^{*26}

ところで国史館に対する答申の今日見うるものは、焦循のそれのみではない。臧庸なども阮元に書を送り、

先生は、近人では、張皋文(惠言)をすでに採録なさつたと聞きますが、盧學士(文弨)・王光祿(鳴盛)・錢少詹事(大昕)・江叔灝(聲)・錢學原(錢學淵、錢塘のことか)・劉端臨(台拱)・凌次仲(延堪)・汪容夫(中)^{*27}の諸君をももう著録なさいましたでしょうか。

といつている。これは汪氏学行記卷三に、喜孫がこの部分のみを収録するところによつたので、書簡の全容を知ることができない。

昭代經師手簡には、汪中が王念孫に送つたてがみ一通をも収め、これを冒頭に置いている。はじめに

六月二日 汪中敬問

懷祖大兄無恙 春仲得

手書 良尉飢渴：

と記すのは、あとの文によつて汪喜孫二歳の年とわかるので、乾隆五十二年（一七八七）の六月である。このてがみで汪中はその抱懷を語つて次のとおりいう。

今時古學大興 經學則程戴 史學則錢邵 小學則若膺 及

足下父子 若文章一道 中欲置身其間 蓋有志不逮也

今時 古學大いに興りて 經学には則ち程〔瑤田〕戴〔震〕 史学には則ち錢〔大昕〕邵〔晉涵〕 小学には則ち若膺（段玉裁）及び足下父子（王念孫・王引之） 文章の一道の若きは 中 身を其の間に置かんと欲す 蓋し志有り

て逮ばざるなり

してみると、彼みずから「文章の道」をもつて当代一流の学者の列に加わろうと志している、というより、その列に互していると自負しているのである。その文章とはもとより学者の文章なのであるけれども、經学・史学・小学の人は儒林伝中の人であるが、文章の一道に生きた人こそ、文苑を飾るにもっともふさわしい人ではないか。

薛壽の汪中贊に「儒林文苑 兼ねて令名有り」の句があつた。これこそ汪中の人とその学問をもっとも巧みに語つたものであつた。かりにそれはその子汪喜孫の感覺をもつてしては、所詮受けとりがたいものであるにもせよ、ここにこそ絶学とよばれる揚州漢学の姿が具現しているのであつて、それは円熟した清朝漢学が誇るに足る令姿でなければならぬはずである。

注

- 1 近藤『阮元』（宇野哲人博士米寿祝賀紀念論集「中國の思想家」下）

2 阮元のこの記述は、汪中の書いた「大清故高郵州學生賈君銘」と「大清侯選知縣李君銘」（ともに「述學」外篇にみえる）とを資料とする。

3 皖南の礼学については、わたくしが以前に書いた「戴震の考工記図について」（東方学第十一輯）が、いくぶんかの論証となろう。

4 近藤「漢学師承の文章——清朝漢学のかたち」（函館人文学会「人文論究」第十七号）

5 倉石武四郎先生「黄承吉とその学問」（昭和十八年「支那語文化」第一号）

6 たとは、汪中は江藩に向って「自分は学問においてうかがわぬくまもないが、九章の術を明らかにすることができなかった。あなたは年若く体力も強いのにどうしてこの絶学をなさらぬか」といって、梅氏の書を贈ったという（漢学師承記巻七）。これは古算法を絶学とよんだものであるが、絶学とはやりてのえがたい学問をいう。

7 王念孫は父の友人であるから自分のことを世姪といっただけ。

8 原文「老伯大人執事」とみえる「老伯」とは父の友人に対していうことは。

9 朱詠齋は名を士彦といい、字は修承。宝応の朱彬（武曹）の子。嘉慶七年（一八〇二）の進士で、翰林にいて国史館纂修に充てられ、手ずから河渠書を書きあげた。二十四年に詹事府少詹事となり、二十五年秋に内閣学士兼礼部侍郎、道光十七年に兵部尙書となり、十八年（一八三八）に没した（統碑伝集卷十季芝昌撰神道碑・清史列伝卷三十七大臣伝統編）。この朱士彦と汪喜孫との交友を知る資料は実は乏しい。しかしその父とおしの間には神父があった。

10 父の朱彬は乾隆六十年（一七九五）の進士で、若いときから外兄に当る劉台拱、高郵の王氏父子・李惇、餘姚の邵晉涵、そして汪中らと切磋し、官についてのちも互にてがみを交して論難をつづけた（碑伝集補卷三十九朱為弼撰墓誌銘）。その著、経伝攷証八巻を見てもほとんどこの交友の所産を思わせるものがある。

11 袁枚。字は簡齋、浙江钱塘の人。乾隆四年（一七三九）の進士で、江寧県の知県となり、父の喪に遇ってからは江寧の小倉山に随園を築き、書を聚め詩古文を楽み、こうして五十年の生活を送り、再びは仕えなかった。漢学派の江藩あたりからは好まれない人であるが、程晋芳が死んで五千余の借財があったとき、袁枚は揚州に行つてその喪を営み借財を返してやったという。小倉山房詩文集ほか詩話尺牘などが残る。嘉慶二年（一七九七）八十二歳で亡くなった。

12 蔣士銓。字は心餘、茗生は別の字。太史とは翰林の官の俗称。江西鉛山の人で、乾隆三十二年（一七六七）の進士で編修を授けられた。その詩は気体雄傑と称せられ、袁枚・趙翼とならべて、袁蔣趙三家と称せられた。忠雅堂詩文集がある。乾隆四十九年（一七八四）六十歳で亡くなった。

13 朱彬がその著の礼記訓纂を都の王念孫に贈ったときのがみ（昭代経師手簡第十六翰）にも「先生巍然一老如魯靈光」の句がみえる。この句は「壬辰癸巳の間（乾隆三十七・八年）汪中や李惇と交友しつつ先生をお慕い申してより、五十年後の今日、諸君の墓木はすでにひとかかえとなつていきますが」につづく。このてがみは道光元年（一八二一）ころのがみと分わかるので、時に王念孫は

七十八歳。もとより王延寿の「魯靈光殿賦序」の「自西京未央建章之殿、皆見隳壞、而靈光巋然獨存」をふまえる。

13 この意味からと、またこのてがみの訳読にはまだ問題の個所もあると思うのとから、とくに原形を示すべく景照した。いっぽう言葉の典故を示す注は加えなかった。

14 汪孟慈文集も稿本があるのみで、還雅齋叢書が出るまでは見られない本であった。わたくしは藤塚郷先生から御秘蔵の精抄本を学徒出陣の餞けとしていただいたが、留守中、家郷の戦災により、父の命とともに焼失した。

15 汪孟慈自訂年譜稿本にみえる。藤塚先生旧蔵、いま東京大学文学部中国哲学文学研究室に帰す。劉盼遂の高郵王氏父子年譜の嘉慶二十二年丁丑七十四歳（急孫）にもこのことを記し「見汪孟慈自撰年譜稿本今藏日本某氏」と注するのがこの本。

16 自訂年譜はここで切れてしまう。しかしこのあとは、汪孟慈文集稿本末尾に附す子の保和の撰した行状によってみることにする。

17 近藤『阮元』（前記六九八頁）参照。

18 六儒頌ともよばれる。しかし萬斯同を加えた七君子頌であったかもしれない。別に精査した結果があるがここには略す。

19 儒林伝稿・文苑伝稿ともに単行する刊本が藤塚先生の秘笈にあったと記憶する。精査を許される機を得ないまま、いまはいずこに帰したかを知らぬ。

20 朱琯については統碑伝集卷十八の李元度撰伝、とくに小萬卷齋文稿について述べねばならない。錢林については碑伝集補卷八に汪喜孫撰の伝がある。また清史稿については繆荃孫の国史儒林文苑両伝始末（藝風堂文漫存卷三）などがある。本稿は汪中の儒林文苑両伝帰属問題に関する周辺にとどめる。

21 藩錫思は字を芸閣といい、涇県の人。嘉慶十六年の進士。道光六年に南河副總河、のち光祿卿となり、左副都御史、兵部吏部の侍郎を歴任して、二十三年に南河河道總督となる（統碑伝集卷三十三引安徽通志）。

22 王藻、字は載陽、号は梅沂、江南吳江の人（鶴徵後錄卷九・國朝詩人徵略卷二十七）は、雍正中の詩人で別人。錢林の弟子の王藻、字は菰原については碑伝がない。文献徵存錄に冠する王藻の序は自筆の書体そのままに刊刻していて、その署名にも図記にも「王藻」とみえる。

23 この跋は漢學師承記には原刊本では經師經義目錄のあとに附されている。汪孟慈文集稿本に収めていないのは故意か過然か。

24 近藤「錢大昕の文学」続（東京支那学会報第八号）

25 家藏「述学」は内篇三卷外篇一卷のほか、汪喜孫がはじめて補遺一卷別錄一卷をつけて（喜孫跋）計六卷として刊行した本で（江都汪氏叢書の述学はこの版本を収めている）、すでにこの罵言は削られている。なお家藏本は封面に汪喜孫の墨跡があつて、喜孫が朝鮮の金正喜に送った本であることがわかる。「先藻舉贈 秋史山泉鑑定 道光七年正月二十六日甘泉汪喜孫題記」とみえ、「汪喜孫印」「孟慈」「金正喜印」「金正喜氏考定之印」の図記がある。なお同時に贈られたものと思う「汪氏學行記」二冊もあるが王孟

慈と金阮堂に関する研究の深い藤塚博士の諸論考中に、これらの書物の存在について語られていないので、当時これがどこに蔵されていたものか不思議に思っている。

26 これは清朝の学者たちの文学に対する認識の歴史を考える一つの資料であると思うが、その方向への探求は別稿にゆずる。第十回東北中国学会で発表した「中国正統文学の崩壊―清朝考証学者における文学意識―」（要旨、集刊東洋学5）の問題につらなるものである。

27 汪中、字は容甫であるが、友人たちの記述にしばしば容夫と書いているのを見る。

*** 本稿は「三」汪中の文学「四」汪中の学問を草することを予想し、「一」において揚州漢学の歴史を概観しつつ、揚州の学者の典型として汪中をとりあげる意味を明らかにし、「二」を汪中論の序説とするものである。時間と紙幅の関係から「一」「二」とどまったので、標題を表記のごとくした。

*** 本稿は昭和三十九年度文部省科学研究費による各個研究「清代揚州の文学の研究」の研究報告の一部とする。